

# 2009年度 ベトナム・スタディツアー 報告書



—NGOネットワーク山口主催の勉強会・研修—  
NGOとODA：国際協力の現場を訪問して

## <目次>

- |                            |                    |
|----------------------------|--------------------|
| 1. ベトナム・スタディツアーを担当して       | 岩本 功               |
| 2. 勉強会・スタディツアー・報告会日程       | 荒瀬澄枝               |
| 3. 9月9日：I M A Y Aの活動現場を訪ねて | 柳瀬美希               |
| 4. 9月10日：OGCDC 活動現場の訪問     | 坂井良子               |
| 5. 9月11日：J I C Aの現場訪問      | 長田翔子               |
| 6. 9月12日：ベトナム戦争と現在のベトナム    | 羽田野 路乃             |
| 7. ベトナム・スタディツアーを終えて        | 秋野美鈴               |
| 8. 小さな“いのち”                | 藤屋侃士               |
| 9. NGOネットワーク山口スタディツアーに学ぶ   | 佐伯 昭夫<br>ジッポン・セーヤン |
| 10. ベトナム・スタディツアーを振り返って     | 小林達志郎              |

## 1. ベトナム・スタディツアーを担当して

IMAYA会長

山口県協力隊を育てる会会長 岩本 功

昨年12月20日のNGOネットワーク山口の情報交換サロンでの議題が、ベトナム(IMAYA)へのスタディツアーはどうか? (IMAYA、協力隊を育てる会の活動現場視察)でした。昨年の第1回スタディツアーは「シャンテ山口」が担当された現地でのホームステイをしながらタイ山岳民族、エコ現場や保育園などを訪問するという、内容のある有意義なツアーであったと報告されていたので、引き受けは大変だと思いました。



今年のスタディツアーがベトナムへと決まる前から、IMAYA (International Medical Aid of Yamaguchi : 国際医療協力山口の会) では今年2月にフエで車いす寄贈や歯科検診をする事を既に計画していましたので、フエ現地で今回のツアー計画を OG CDC

(Office of Genetic Counseling & Disabled Children) と相談したり、本県出身の JICA 青年海外協力隊員の徳本さん(水上生活者支援)にも事前に会ったりして、ツアープランを考えることが出来たことは幸いでした。スタディツアー立案に当たっては、まず日本側の NGO/IMAYA と、ベトナム側の NGO/OG CDC の、それぞれの活動や両者の協力関係を体験できるプランを考えました。次いで飛躍的な発展途上にあるベトナムでの JICA/ODA が果たしている役割や、NGO 活動と ODA プロジェクトが如何に組み分けられているかなどを学べるような計画も考え、当初は徳本隊員の活動現場視察の予定でしたが、予定より早い活動終了となったために中止となりました。しかし、NGO ネットワーク山口の事務局水野さんのご尽力により、フエ中央病院視察と京都大学が支援し、フエ農林大学がフエ近郊のボー川流域で行うという「草の根パートナー型」プロジェクトサイトの視察が実現できましたことで、スタディツアーは一段と充実したものとなりました。

また、IMAYA 活動と OG CDC 活動の背景にはベトナム戦争で使用された枯葉剤による後遺症などがあり、ベトナム戦争を知らない若い世代の参加者の方々のためにもベトナム戦争の戦跡めぐりや戦争証跡博物館での学習を入れました。このようにして盛り沢山の 5泊6日の旅に仕上がりました。

今回のスタディツアーでは、これまでの自分自身の活動であまり深く見えなかったことが、参加者のそれぞれの視点からの質問やアドバイスからクリアとなった点も多々ありました。JICA の ODA プロジェクトにはハード面とソフト面での乖離という批判のあるところですが、ベトナム中部地域医療サービス向上を目指すフエ中央病院での取

り組みは、医療に関係するものから見てとても深く検討され、これからの中部ベトナムでの医療向上に貢献するものと思いました。また京都大学とフェ農林大学が組んだ草の根パートナー型のプロジェクトには壮大なものがあり、このプロジェクトは今年8月に終了していますが、まだまだ長期的に持続し、地域の安全や生活の質向上になって欲しいとのことです。

今回のスタディツアーを担当してみまして、事務局の企画されたツアー前の連続講座がとても重要なカギであった事が分かりました。是非とも第3回のツアーが計画される事を願っています。

とてもいい勉強をさせて戴きました。事務局をはじめ参加者の皆様にお礼申し上げます。



## 2. 勉強会・スタディツアー・報告会日程

NGOネットワーク山口副会長  
山口県協力隊を育てる会副会長 荒瀬澄枝

昨年度の第1回NGOネットワーク山口の研修に続き、第2回目を実施する運びとなった。参考としたテキストは、「援助する前に考えよう：参加型開発とPLAがわかる本」（2006年 開発教育協会発行）である。事前学習3回でワークショップを実施し、3回目にはスタディツアーを引き受ける団体から行き先や活動内容の説明を加えた。

研修を始めた目的は、NGOネットワーク山口の関係者間の情報共有を行うとともに、NGO活動に関するステップアップを図り、団体以外の一般の人にも参加を促すことにより、ソトからの視点を加えていくことであった。団体間で情報交換をすることはあったが、実際にそれぞれの活動現場を訪問し合うことは今まであまりしてこなかった。お互いの現場を見ることにより、分かり合える共通項が増えてきたのではないだろうか。

今年度の事前学習会チラシ作成、準備、アンケート集計等、スタディツアーの航空券

手配等、NGOネットワーク山口事務局の水野雅子さんに大変お世話になった。ここにお礼を述べたい。また、事前学習のアンケート作成に当たっては、山口県立大学に出向き、学生さんと話し合いを通して原案を作成させていただいた。

本年度の研修は、以下のような日程で企画をした。

- ・ 8月22日（土）：第1回事前学習会  
ワークショップ1回目「援助する前に考えよう」
- ・ 8月23日（日）：第2回事前学習会  
ワークショップ2回目「援助する側、される側」
- ・ 8月29日（日）：第3回事前学習会  
ワークショップ3回目「私に出来ること、出来ないこと」、  
「いざNGOの現場へ」
- ・ 9月8日（火）から13日（日）：スタディツアー
- ・ 9月26日（土）：報告会



2回にわたる取り組みにより、NGOネットワーク山口側にも、一般参加者側にも見えてきたものがあるはずである。さて、来年度にはどのような行先が登場するのだろうか。

### 3. 9月9日：IMAYAの活動現場を訪ねて

山口県立大学国際文化学部3年

柳瀬 美希

#### (1) 日程

- 7：30 アジアホテル出発
- 8：30 クアンチ省 Hai Lang District にて車椅子寄贈
- 9：50 クアンチ省 Dong Ha Township にて車椅子寄贈
- 11：00 クアンチ省 DMZ（ベンハイ川）訪問
- 14：00 ホームビジット
- 15：30 クアンチ古城訪問
- 16：30 戦争で焼け残った学校見学
- 19：00 青年海外協力隊員（徳本さん）と夕食



#### (2) 活動内容

今日は、IMAYAの活動現場訪問を中心に、DMZ（非武装地帯）の訪問などを主な目的として活動した。午前中は Hai Lang District で5台、Dong Ha Township で8台の車椅子を、IMAYAから各地区で選ばれた身体障害者への贈呈式がとりおこなわれた。車椅子を寄贈された方は地雷で足を無くしたり、交通事故で足を悪くされたり、また病気で麻痺した体になった人々だった。役場で公式の挨拶が行われた後、一人ひとりに車椅子が贈呈され、保障証が手渡された。車椅子はベトナムでつくられているもので、舗装されていない道でもハンドルを軽く操作するだけで、簡単に走れるように設計されている。



車椅子を受け取った方々のなかの一人にお話を伺うと、「今までは外に移動できなかったが、車椅子のおかげで宝くじの販売ができる。とてもうれしい。」とおっしゃっていた。車椅子贈呈には人民委員会とOGCDCが審査を行い、不正等がないように配慮して贈呈先が決められる。今回車椅子をもらった方のコメントからもわかるように、宝くじ販売で生計を立てたり、自転車修理や家電修理等で生計を立てるために、市場や街

に自分で出ていくことができるようになっている。移動は家族や親せき、友人などに頼んでいた人が、「自由」を手にすることができる手段として、車椅子は無くてはならないものである。

昼食の休憩時間を利用してDMZを訪問し、かつてベンハイ川の真ん中で南北ベトナムを分断していた17度線や、川にかかるヒェンルン橋、橋のたもとにある博物館等を見て、ベトナム戦争について学んだ。わずか4キロの川を挟んで戦争が行われていたのと思うと、心が痛んだ。博物館には当時の武器や写真などが展示されており、身が引き締まる思いがした。



午後には、車椅子を贈呈された方の自宅にホームビジットをした。1軒目は、今年2月に車椅子をもらったグインさん宅である。6か月を経た車椅子の状態を確認することと、車椅子をもらう前と後の変化を尋ねるためである。田んぼに囲まれた道を歩いたところに、グインさんの家があった。先週の洪水で水が溢れた田んぼの中で、人々が腰まで水につかって稲をかつている様子もみかけた。奥さんは遠くの田んぼに稲刈りに出かけているという。グインさんは、縁側のようなところで、自転車修理をしていた。車椅子を得てからは、「生活がしやすくなった。自転車の修理を仕事にしているので、自分で町まで部品を買いに行けるのが嬉しい。」と話してくれた。



2軒目に訪ねたのは、今朝車椅子をもらったばかりのルンさんだ。自分の店の前で車椅子に乗ったま



ま、座席を倒して昼寝をしていた。日中40度近くなるベトナムの田舎では、ハンモックを広げたり、長椅子で体を休める人の姿を目にする。車椅子をどう使っていきたいかと尋ねると、「テレビの修理が仕事なので、部品を買いに行きたい。また、自分で店まで通勤したい。」とのことだった。今までは、息子さんのバイクに載せてもらって店まで来ていたそうだが、今日からは2キロの道のりを車椅子で通勤するそうである。今朝の贈呈式には、100キロの道のりをバスにのってやってきた山岳民族の人もいた。

これまで、160台を超える車椅子が人々に動く自由を与えてきた。1台は1万6千円である。車椅子を受け取りに来た人々の緊張した顔と、受け取った後に試乗して嬉しそうな笑顔を浮かべる姿の違いは大きかった。1万6千円の寄付で、一人の人が不自由

な生活から抜け出せ、人生が拓けるという事実に、参加者は大きな衝撃を受けた。高温多雨のベトナムでは、サビやパンクなどの面で課題が残るのではないかと話し合ったが、パンクは比較的簡単に直せるようであった。サビのほうは、ホーチミン市で車椅子を製作している工場で、今後さらに尋ねてみる必要があるということになった。

夕方、フエの世界遺産として名高いクアンチ古城を見学した。1972年に、81日間も続いた爆撃で数千人のベトナム兵が落命したクアンチ古城の跡地には、大きな鎮魂碑が立っている。ちょうどこの日は、9月9日の爆撃の日で、慰霊行事が行われたとのことだった。併設されている博物館も訪問し、武器、写真、古タイヤからつくったベトナムサンダルなどの展示を見学した。クアンチ古城は現在修復作業が行われており、今後何年かかるか、何十年かかるかわからないが、全様が復元される日が楽しみであった。

ホテルへ帰る途中に、ベトナム戦争時にフエで唯一残ったとされる建物を見学した。「すべての生き物を抹殺してしまえ」という命令のもとで、フエ全土が焦土化したなかで、たった一つ残ったという家屋である。もともとは、お坊さんがお金を出しあって建てたとされる学校であった。壁には銃撃の後が数多くあり、被害の凄まじさを感じた。だが、歴史的にも重要な建物であるのに、不法居住している人がいてびっくりした。

夜、山口県立大学国際文化学部卒業の先輩で、青年海外協力隊員である徳本さんと食事をした。協力隊のことやベトナムでの生活など、色々な話が聞くことができた。大学院時代には、隣国のカンボジアに何度もフィールドワークに出かけたという徳本さんだが、ベトナムはまた違った誇り高いプライドを持つ国民性があり、異文化適応には驚くことが多いというお話だった。ベトナムの風土に溶け込んでいる様子に、あと一年ある任期が終了する頃に、またお話を聞きたいと思った。

長い一日だった。訪れるところが多く、ハードなスケジュールであった。車椅子をもらった方々の笑顔が心に残るとともに、ベトナム戦争の遺跡や資料を見て考えたことが心に重く押し掛かる夜となった。

### (3) 全日程を終えて考えたこと：新たな発見

私は大学の「地域実習」という授業の一環で、IMAYAのメンバーに加えていただき、今回のスタディツアーに参加した。このツアーは私にとって初めての海外経験であり、日本以外での国際交流であった。不安を抱えての出発となったが、不安を吹き飛ばすほどの変化を自分の中に植えつけることができた活動となった。

今回ツアーに参加して、以下の三つのことを学んだと思う。一つ目は、「国際的な問題を身近なこと捉える」ということ。二つ目は、「そこで自分がどう動けるのか」ということ。三つ目は、「コミュニケーション能力の必要性」である。

一つ目であるが、ベトナム戦争についての施設訪問を行い、被害を目の当たりにすることで考えさせられた。訪問する前は、勉強会や事前学習を通して、ベトナムに対して

「枯れ葉剤の被害で大変な国」といった認識しか持っていなかった。だが、ホームビジットをしたり、孤児院や盲学校などを訪問して、足を失った人、目の見えない人、遺伝子が壊されたために様々な障害を持って生まれてきた人々などを実際に見たことで、多大なショックを受けた。被害が次世代にも引き継がれてしまう現実、日本の原爆被害と重なるようなところもあり、身近な問題として捉えられるようになった。

二つ目については、IMAYAの活動現場やOGCDCの活動現場訪問、JICAの病院現場訪問を通じて考えた。それぞれの現場では、支援を受ける側に立つ人々の嬉しそうな表情や声を確認した。「車椅子のお陰で、これから生活が楽になる」と言った人の言葉は、本物である。援助をする側・される側の立場を考慮する事前学習を通して考えたことも多いが、実際には、援助を受けられなければ、自分ではどうすることもできないような立場の人もある。車椅子は、人間の自立支援に役立っており、活動の必要性や重要性を感じた。ベトナムに限らず、貧困国や最低ライン以下の生活を送っている最貧困層の人々には、間接的ではなく、直接的な支援が必要であると感じた。また、そういう活動にかかわりたいと思った。

一方で、課題点も学んだ。OGCDCの現場で各学校を訪問した際に、子どもたちとの接し方がわからなかったという点だ。いくら支援をしたくても、相手との良い関係が築けなければ意味がない。写真の取り方や接し方、遊び方など詳しく勉強しておくべきであった。これが三つ目につながる。今回の活動を通して、コミュニケーション力ということについて、非常に考えさせられた。語学もだが、相手に伝えるという姿勢が重要だ。自分では積極的に動いていたつもりであったが、なかなか相手に自分の言いたいことが伝わっていなかったり、注意を受ける場面もあった。語学面ではOGCDCスタッフの方とのコミュニケーションには苦勞した部分もあったので、改めて語学を含めたコミュニケーション能力の必要性を学んだ。

以上のように学んだことのほかには、課題も多く発見した。これらは、このツアーに参加したからこそ得られたのであり、日本に留まっていたのでは発見できなかった。次に参加できる機会を探し、今回の自己の課題を克服したい。

## 4. 9月12日：OGCDC 活動現場の訪問

山口県立大学国際文化学部3年

坂井良子

### (1) 日程

8:00	アジアホテル出発
8:30	FUTURE SCHOOL 訪問
9:30	HEALING THE WOUNDED HEART 訪問
11:00	阮朝王宮見学
14:00	DAC SON PAGODA 訪問
15:00	BRIND SCHOOL 訪問
17:00	フェ医科大学訪問
20:00	夕食～宮廷料理体験～

### (2) 活動報告

スタディツアー2日目は、IMAYA が支援を行っている OGCDC の活動現場の訪問を中心に研修を行った。

まず FUTURE SCHOOL という知的障害者施設を訪問した。障害をもった子どもに未来をとという願いが込められた学校である。生徒は65人で、年齢は6～25歳である。生徒の学費は、もとは1カ月大体50万ドンだったが、OGCDC と地域からの資金があるので、大体月に5～10万ドンである。ただし、OGCDC に寄付をしていたオランダの NGO から資金の終了を告げられており、教員の給料をどう工面するか課題に直面しているということであった。これらの子どもたちの親は貧困層にあり、この学校に来ることができなければ、家に放っておかれるだけとなる。障害者に対する教育を行っている省もあるが、この中部地域のこのあたりの地域ではまだまだということであった。

この学校では障害の大きさをクラスに分けていて、A から G クラスまでであった (F を省く)。私達は全てのクラスを見学した。最初に行った D クラスは障害が重いクラスで、神経病でずっと喋り続けている子や、小さい頃に薬を飲み間違えて障害者となった生徒がいた。このクラスには壁に日課表が掛けられていた。見学した時間帯はちょうどフリータイムで、色分けの授業をしていた。

フリータイムには、その子の障害に合った個別に指導がなされる。D クラスでは、色分けのカードを使った訓練をする子、コップから水を飲む練習をする子など、先生を囲んでの訓練や学習が行われていた。A、B クラスは障害の軽い子どもたちがおりに、一緒に折り紙をしたり、歌を披露しあったり、踊りを見せてもらったりした。障害が軽いとはいえ、あとで踊りの上手だった「子」が実は成人だと知らされ、見ただけではわから

ない障害と向き合っている人々もいることに気がつかされた。C、E、G クラスは授業中で、アルファベットの練習や、算数の授業が行われていた。最後に生徒達に鉛筆と折り紙、そして折り方が英語で書いてある説明書を贈った。

#### Future School の日課表 (7:30~)

1	運動 ～挨拶～
2	フリータイム (先生有)
3	フリータイム (先生無)
4	読み書き
5	算数 ～昼食・長休み～
6	フリータイム (その日によって違う)
7	フリータイム (先生無)
8	美術・音楽・料理など
9	掃除

次に耳の不自由な人達が働く **HEARING THE WOUNDED HEART** という作業場と直売店 (ショップ) を訪問した。まず作業場では鞆、刺繍、箆などがたくさん作られている最中だった。ゴミとして捨てられる皮から作った鞆や、ペットボトルから作ったポシエットなどのリサイクル商品も多くあった。そこで働いている人は1階で作業し、2階に住んで生活している。次にチャリティ・ショップに行き、小物などを購入した。レオナルド・ディカプリオやアンジョリーナ・ジョリーなどといった世界的に有名な芸能人も多く訪れていて、店内には彼らの写真がたくさん展示してあった。ここで買い物をするにより、心臓手術に対して寄付をすることになる。

午前中の残った時間を利用して、フエの文化遺産に指定されている阮朝王宮の中を見学した。阮朝王宮とは1802年から1945年まで13代にわたって続いた王朝で、1993年に世界遺産に登録された中国風の建物である。入場料は現地の人と外国人では差があり、現地の方が安い値段で入場できる。ベトナム戦争中に王宮内の大半は破壊されてしまったそうだが、今はほとんど修復が施されていた。しかし壁の至る所に戦争中にできた痕が残っていた。



午後になって、まず DAC SON PAGODA という孤児院を訪問した。院長のディクさんを中心に 24 人の尼僧が運営をし、195 人の孤児が生活している。孤児には大学生もいれば、生後 1 カ月の幼児もいる。生後すぐに門に置き去りにされた子もいれば、帝王切開で母親が死んでしまった子、体全体が麻痺して動けない子、高熱により目が見えなくなってしまう子など、様々な理由により孤児院で生活している。ここでは子ども達のために鉛筆、折り紙、ぬいぐるみを贈った。ぬいぐるみを子ども達に手渡した時、子ども達は勿論、修道女ディクさんも「ここにいる子ども達の多くは親がなく、プレゼントをもらったことがない子ばかりなので本当にありがたい。」とおっしゃっていた。日本では一人の子どもが何十個と持っているぬいぐるみだが、ここでは一つを大切に抱きしめる様子に胸が打たれた。私たちと同じような年齢の、若くて明るい尼僧もおられ、子どもたちの面倒をみておられ、そのような人生もあることを知った。



次に BLIND SCHOOL という盲学校へ行った。学生は主に点字とマッサージを学び、今までに 164 人が卒業し、そのうちの 24 人がマッサージ師になったという。政府の資金で全てを賄っているのだから、生徒の学費は無料だそう。全盲でありながら、パソコンで文書やインターネットを利用し、マッサージの授業もある。パソコンを利用する際は、「JAWS」というヘッドフォンを使うソフトを使っている。最後に盲学校の生徒達が歌と演奏を披露してくれた。目が見えないのにバオという弦楽器を奏でている姿に驚いた。私達も「ふるさと」を披露した。その後、生徒たちに鈴の入った手作りの紙風船を渡して盲学校を後にした。



最後にフエ医科大学を訪問した。壁には OGCDC の活動を支える様々なグループの名前が書かれた金色のプレートがたくさん貼ってあった。OGCDC の活動の背景には戦争時に撒かれた枯葉剤があるが、今はどんな理由でも障害のある子ども達は救い、早期発見、早期治療を心がけていると、ナン博士がおっしゃっていた。枯葉剤による影響は、身体的なものだけでなく、結婚問題等の社会的、生活的な側面にも影響を与えることが分かった。1 時間にわたり、活動について解説をしてくださったり、私たちの質問に答えて下さった。

I MAYA の岩本先生が出される奨学金に選考された 3 人の医学部・薬学部奨学生との交流もでき、日本とベトナムの学生生活について質問をし合った。日本人は内気（シャイ）というが、ベトナム人はもっとシャイだそう。医学部・薬学部の授業料は年間 2 万円程度で、毎年、数名の奨学生に奨学金を与えている岩本先生に、教育の機会を得た喜びを内気ながらも体全体で表現していた。ベトナムの医学生は、卒業しても、留学しても、国のためにベトナムで働くという意思が強いということであった。

### (3) 全日程を終えて

今回のツアーで様々な所を見学、訪問したが、その中でも一番心に残ったのは 4 日目のクチトンネル、博物館見学だった。飛行機を降りて初めてベトナムを見た時、本当にここで戦争があったのかと疑問に思うくらいに街がとても栄えているように見えた。しかし、クチトンネルで本物の銃声を聞いたり、戦車や落とし穴を見たり、博物館で様々な写真を見たら、当時の悲惨な様子が凄く伝わってきた。もし自分がこの場所にいたらどんな気持ちだろうと考えさせられた。

また、色々な先入観が取り除かれたように思う。まず、障害を持った方は生活の中でできることが限られていると思っていたが、盲学校へ訪問した時に校長先生の話聞き、障害があっても大きな可能性があるということが分かった。また、現地に来る前から枯葉剤のイメージが強かった。確かに今でも枯葉剤による遺伝子問題はあるが、病院や障害者学校を訪れ、今はどんな理由であろうとも障害のある方は救うという広い考え方がありことが分かり、ベトナム戦争を過去の事実として受け止め、前向きに生きている人が多いように感じた。

個人的な課題としては、まず英語をもっと勉強しようと思った。私は少し病院でお世話になったのだが、現地の医師の方々が英語で話しかけてくれたのに聞き取れないことが多かった。これから異文化交流をし、別の国へ行くことがある時のために、英語で会話が十分に取れるようになっておきたい。

そして、もっと積極性を持たなければいけないと感じた。ただ皆について歩くのではなく、そこで自分にできることを見つけ、積極的に現地の方達と交流できなければならないと思う。

## 5. 9月11日：JICAの現場訪問

山口県立大学国際文化学部2年

長田翔子

### (1) 日程

- 8:00 アジアホテル出発
- 8:30 フェ中央病院到着
- 13:20 フェの農林大学到着
- 16:00 プロジェクトの現場訪問
- 17:00 フェ中央病院
- 19:10 VN255 ホーチミンへ



### (2) 活動内容

#### ・フェ中央病院にて

フェ中央病院は、ベトナム中部でもっとも大きな総合病院である。現在、ベトナムに数少ない国立病院の内の一つである。フェ中央病院の院長は、ベトナムで初めて心臓移植手術に成功した人である。院長にはなかなか会ってもらえないとのことであったが、今回はJICAプロジェクトの視察であり、JICA事務所を通しての訪問依頼であったため、院長先生との会談が実現した。JICAプロジェクトを担当している丸田調整員と清水専門員（医師）も交えて、院内で実施されているJICAプロジェクト視察を許可してくださったお礼を、岩本先生が述べられた。

病院内の視察は、国際関係担当職員の案内で行われた。海外からの支援がたくさんあるため、英語やフランス語などができる専門職員が、視察や交渉、フォーラム、国際会議等を担当しているとのことであった。この総合病院には、毎日3000人の学生が研修にやってくるという。病棟や検査室等で研修を受けている医学研修生を多く見かけた。

JICAプロジェクトでは、7階建ての救急病棟が建てられ、必要な先端機器が配備されていた。もっとも多く搬入されるのはバイク事故で運ばれてくる患者で、まずは救急医療に運ばれ、そこから患者にあった科に運ばれるそうである。清潔で設備も充実しており、日本の病院とあまり変わらない感じがした。ICUでは特別の靴カバーをして、緊急医療の状況を視察させていただいた。政府の定めた定員があるが、それ以上の患者数に対応するのに苦勞しているそうである。

JICAプロジェクトでは、現在、研修やトレーニングの充実に力を入れているということであった。フェ中央病院のような大きな病院から、地方の小さな病院の保健医療サービスの質向上を目指し、定期的に研修を行っている。地方の病院から各何名と指定して研修を受ける医師や看護師、医療機器の技術士等を派遣してもらい、研修プログラ

ムを組んでいる。旅費や滞在費は J I C A プロジェクトが賄う。テキストもプロジェクトで作成したものを使用する。ここで学んだことを各病院に持ってかえり、それを同僚や部下に伝えていくことが重要であるとのことであった。

手術室や病棟、I C U に入院している重症患者の家族が滞在する宿舎などを見学したのち、研修医が心臓手術室を見て学ぶことのできる施設を見せていただいた。手術室の真上がガラス張りになっており、そこから手術の進行や手順、看護師の介添えの手順を見ることができ、西欧にならった最新のオープンな研修施設となっていた。



J I C A 専門家、清水医師によると、援助をする上でもっとも大切なことは、「それが本当にベトナムの人にとって必要なことなのか」を見極めることだと考えている。清水医師は、専門家としてアフリカやアジア等の様々な国に派遣されており、かつてアフリカに専門家として派遣されたことのある岩本先生と話の通じるころがあった。

援助の成果を上げるために、日本側がやりたいことであっても、ベトナム側とすればやらなくてもいいこともある。また、ベトナム側がやりたいけど、日本側としてはできないこともある。また、2国間協定に基づく国際協力において、ベトナム政府と日本政府が決めたことであっても、人々の側からするとすべて O K というわけではない。両政府が知らない現場もある。調整員の丸田氏によると、だからこそ、J I C A のような国際協力と、N G O のような草の根国際協力の両方が必要であり、お互いの行き届かない所を補完しあえるということであった。

実施したプロジェクトが成功しているかは、後日チェックすることも大切だということであった。やりっ放しだと、期待した成果が継続しないため、どのようにすれば、地元の人が自分たちの力で継続できるかを考えた支援だということであった。

#### ・フエ農林大学にて

京都大学と連携した地域密着型の J I C A プロジェクトで有名な、フエ農林大学を訪問し、「ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全の向上支援」について話をうかがった。山岳地帯、平野地帯、海岸地帯と3つの地域でそれぞれの地域に適したプロジェクトを組んでおり、それぞれの担当者から詳しいプロジェクトの説明が行われた。

まず、山岳地帯では、以下のような取り組みが行われている。



- ・ 収入安定・向上を目的にヤギの飼育
  - ・ 女性による伝統工芸の再生
  - ・ 村の集会場の建築
- 次に、平野地帯では、
- ・ 学校での防災教育
  - ・ 養豚
  - ・ 集会場の設立
- 最後に、海岸地帯では、
- ・ えび、魚の養殖(うなぎの養殖は失敗)
  - ・ 生産物多様化のためのきのこの栽培
  - ・ 学校での防災教育
- である。



ベトナム中部は台風や水害が多く、土地が瘠せていて作物がとれないところが多い。山岳地帯には少数民族がおり、海外のデルタ地帯は水害にみまわれやすく、国土の幅は狭い。塩害は深刻である。ベトナム北部や南部に比べて経済的に貧しい中部の生活改善を目的に、村の人々と協力して、その地域にあった活動をしているとのことであった。

説明の後、実際に J I C A が生活向上支援をしている村を訪問した。フエ農林大学から比較的近い、車で 40 分程度の村である。途中、でこぼこ道や、すれ違いのできないほど狭い道を通り、村に向かった。この村では電気が通り、ガスも水もあり、生活に必要な最低限のものがそろっていた。ただ、ガスは豚の糞を発酵させた自家製のガスである。村の農業協同組合のような場所には、同様の大きな施設を設置し、生活改善が進んだとの説明があった。ホームビジットさせていただいた家では、収穫したとうもろこしを干していた。豚やアヒル、鶏が飼育されており、台所のそばの豚小屋の隅にガスを発酵させる装置が置かれていた。この施設の難点は、ガスを発酵させた後のカス（泥）の処理である。畑の肥料に使えるというが、かなり臭うし、扱いにくいいため、そのまま放置されがちだとも聞いた。

この村での生活改善のもう一つの自慢は、洪水の際に避難する屋根裏の設置である。人間だけでなく、豚を避難させることもでき、非常時対策がなされていた。

### (3) ツアーを通して考えたこと：強く生きる

道で、片足のない人を見た。足首から先が変形し、歩行困難な人とその家族に会った。地雷で両足をなくし車椅子で生活している人の話を聞いた。日本を出る前から、ベトナム戦争で撒かれた枯葉剤のことや地雷のこと、奇形児のことは知っていた。だから、このような身体に障害を持っている人がいることも分かっていたはずだった。けれど、事前の勉強では分かっていなかったことがたくさんあった。

実際に会って話を聞いて、私は、私が「興味本位でベトナムに来た」ということを痛

感じた。ほんとにそんな人がいるだろうか。事前勉強の時点では、いくら本を読んでもインターネットで調べても、どこか遠いことのように感じ、自分とは無関係の「他国の誰か」としか感じられなかったのだと今になって思う。実際、変形した足を目の当たりにして、また地雷の話聞いて、彼らがどこか別の国の誰かではなく、今、目の前にいる同じ人間であるのだということを初めて理解した。何の罪もない人たちが、アメリカの撒いた枯葉剤や地雷によって身体障害者になってしまった。それを私はかわいそうだなと思ったが、彼らは皆前向きであった。ジョークを言って笑いかけてくれる人もいた。自分がもし同じ立場になったらどうだろうと考えると、明日が見えなくなった。そんな風に笑顔でいられるだろうか。私の中に、アメリカに対する憎い気持ちが生まれた。アメリカが枯葉剤を撒かなければ、と考えたからだ。

けれども、クチトンネルに行き、ベトナム側がアメリカ軍に仕掛けた数々の落とし穴や、それにひっかかった兵士を助けようとした仲間のアメリカ兵士もすべて殺したという残酷な話を聞き、戦争はどちらか一方が悪いものではないのだと考えるようになった。枯葉剤を容認するわけではないが、アメリカ兵も生き残るために死に物狂いで戦ったのだということが分かった。戦証博物館には、ベトナム戦争反対に立ち上がったアメリカ市民の写真もあった。市民の声を無視する国家や政府は、どこにでも存在してきた。

援助とは何か、今自分にできることは何か、それを考えるためにこのスタディツアーに参加した。今回のツアーで、「本やネットで調べるだけではだめだ、行動を起こさなければ」ということを強く感じた。行動を起こすということは、まずは行ってみる、見てみるということかもしれない。行ってみれば、さまざまな人との出会いを通して、その人がどんな気持ちでどんな生活をしているのかを感じ取ることができる。足がなくても前向きに生きている人の強さにふれることもできる。ただの観光旅行では見ることのできないものを観、話すことのできない人と会話を交わしてみることが大切である。私も、よそ見をしないで、自分のやりたいことに一生懸命に取り組み、強く生きようと思った。

また、一方だけを見て、「あれが悪い、これが悪い」と考えるのではなく、物事を2つの対立する視点から、多面的にとらえることの重要性も感じた。私はまだ自分に何ができるのかは分かっていない。しかし、この旅でなりたいた自分と、そのために今すべきことが見えてきた。ベトナムの旅は、先を見失いかけた自分の再スタートになった。

このツアーに参加できてよかったです。岩本先生、ありがとうございました。

## 6. 9月12日：ベトナム戦争と現在のベトナム～

山口大学理学部4年

羽田野 路乃

### (1) 日程

8：30 Riverside Hotel 出発

10：15 クチトンネル着・見学

12：10 クチトンネル出発

14：30 戦争証跡博物館見学

15：30 統一会堂見学

16：00 中央郵便局見学

サイゴン大教会・ホーチミン市車内観光

16：30 Riverside Hotel 着

自由散策・国営百貨店 etc…

22：00 Riverside Hotel 出発

ホーチミン市・タンソンニャット国際空港へ



### (2) 活動内容

#### ・クチトンネルにて

ホーチミン市の中心部から北西へ約70kmにあるクチ地下トンネルを見学した。入場すると初めにビデオ上映室があり、解放戦線の戦いの様子が日本語などで約20分間上映されていた。ベトナム戦争当時、この地域に解放戦線の拠点が置かれ、敵と戦闘する非常に多目的な場所であったことや、地下で生活しながらの人々の戦いの様子を当時の映像を交えてのものだった。また、クチの人々の「食料が十分に足りれば戦える」という考えから、誰もが手に銃とスキを持ち、全ての人が守り兵士という団結力を感じるものだった。これらのビデオ上映は、別々の小屋で6、7ヶ国語で常時行われている。

アメリカ軍による度重なる空爆と大量の枯葉剤の投下にも、解放勢力は地下に総距離約250kmにも及ぶ地下トンネルを掘ってゲリラ戦を続けており、現在、当時の地下トンネルの一部に実際に入ることができるようになっていた。トンネルの土は固く、腰をかかめて入ると暗く狭く湿気があり快適といえるものではなかった。訪問者が体験できる100メートルでは、ほとんどの人が20メートルでギブアップしていた。トンネルの中には、病院や台所、作戦会議室などがつくられており、狭く暗く長い地下での生活空間となっていた。台所から出る煙が敵に発見されないように離れた場所から少しずつ煙を出す工夫や、トンネルの入り口に木の葉や枝でカモフラージュなどの様々な工夫も見られた。トンネルの入口は本当に狭く、最後に入る人が爆弾をしかけて中から蓋をするため、入口を見つけたアメリカ兵が蓋に手をかけると爆発し、入口がわからなくなるとい

うしかけとなっていた。

トンネルだけでなく、林の中にはあらゆるところに落とし穴が掘られ、中からヤリが突き出るものなど様々な手法を用いた抵抗の様子を物語っていた。また林の中を歩くと、地雷で爆破された当時のアメリカ軍の戦車もそのまま残され、ところどころには大きく陥没した爆撃の跡もあった。戦闘をしかけた深く細長い壕もあり、通りながら見過ごしてしまいそうな悲劇の跡も、ガイドの方のおかげで一つひとつ感じることができた。クチトンネルは、精密でどんな建築家でも設計できないといわれるように、アメリカ軍がこの地下トンネルの存在を知らず、複雑な構造を最後まで攻略できなかったことを実感した。

見学途中には、ホーチミンサンダルと呼ばれるタイヤで作られ当時のサンダルを作成しているところや、当時の食料であったタピオカを蒸かした軽食の試食場所、闇夜にまぎれて外に出るために着用した黒いユニフォームと毒ガスよけのマフラーの展示場、射撃場などもあった。射撃場から時折聞こえてくる銃弾の轟音は、ジャングルの中で今まさに戦闘中という雰囲気をよく出していた。

#### ・ BANH XEO(ベトナム風お好み焼き)

昼食は、現地のガイドの方に紹介していただいたベトナム風お好み焼き「バイン・セオ」を食べた。ベトナムのお好み焼きは、パリッと焼けた外皮の中にエビや豚肉とたっぷりのモヤシが入ったものだった。それを食べやすいサイズに分け、籠に山盛りされた様々な野菜や薬草に包み、付けダレで食べた。デザートバイキングもあり、「バイン・セオ」のヘルシーさとスイーツがうけるのか、現地の女性が多く訪れていた。ここでは、日本とベトナムの女性の思考の似ているところを感じることができた。

#### ・ 戦争証跡博物館

ベトナム戦争の歴史を、屋外では実際に使用された戦車や戦闘機、屋内では写真などの展示で残している博物館だった。また、隣接して刑務所もありギロチンや牢屋も見学できた。

悲惨なパネルやホルマリン漬の奇形胎児などの展示は、当時の様子が生々しく、人間の手で行われたことを前に目を覆いたくなった。パネルの中には、アメリカ人兵士が解放軍兵士の死体の残骸を運んでいるものや、爆弾から逃げるためにベトナム人の母と子が川を渡っているもの、枯葉剤をまかれる前と後の様子など、想像以上に幅広く多くのものを鮮明に展示していた。また、世界中の従軍写真家の撮影した写真の中には、日本人写真家の撮影したものも特別展示されていた。

当時の様子だけでなく、現在でもベトナムで見かける枯葉剤被害で頭だけが大きくなっている水頭症の子どもや、眼球が飛び出しているクルーズン症候群の子どもなどの被害者などの様子のパネルもあった。戦争の影響は、今も残り続けていることを感じた。

また、枯葉剤被害者からアメリカのオバマ大統領にあてた手紙や、98年からベトナムを訪れ、枯葉剤、エイズ、麻薬、ストリートチルドレンなどをテーマに日本全国で写真展・講演会を開催する村上康文さんの私達来館者に訴える手紙なども展示されていた。ベトナム各地へ取材に行ったことで感じて書かれた手紙には、傷を癒そうと努力し、満面の笑みで応える人々のことが記されており、一度起こしてしまうと決して終わらない戦争について深く考えさせられた。人間の弱さと強さをここで感じ考える機会となった。



#### ・統一会堂

南ベトナム政権時代、独立宮殿とよばれた旧大統領宮廷である統一会堂は、外からガイドの方に解説していただき見学した。フランス領だったこともあり、フランス式の造りで、南北統一の会議が行われた場所でもある。また、1975年4月30日に解放軍の戦車がこの宮廷の鉄柵を突破して無血入城を果たしたことで、事実上ベトナム戦争は終結した。現在では、国際会議や、展覧会など様々なことで利用されていた。



#### ・中央郵便局、サイゴン大教会

19世紀末フランス政権時代に建てられ、入るとすぐ正面にホーチミンの大きな肖像画があり、中央には記念切手などのみやげ物売り場、天井は、アーチ状のクラシックな造りとなっている美しい建物だった。



中央郵便局の横には、赤レンガ造りの19世紀末に建てられたサイゴン大教会があった。サイゴン大教会と中央郵便局周辺は、東南アジアにあるベトナムというよりも、ヨーロッパで歴史的建築を見ているような感覚であった。「この風景を写真に撮って、『パリに行きました』といっても、大丈夫ですよ」と、ガイドが説明をするのに肯けるほどの景色だった。夜には綺麗にライトアップされ、カップルが多く訪れていた。ガイドの方の話によると、ベトナム人は昼間は車間距離を守らないが、夜は皆きちんと車間距離を守っているという笑い話も色々してくれた。



また車内からホーチミン市を見学すると、歩道の端でプラスチックのイスで路上カフェを営業している人もいた。これは、違法なのだが多く観られた。警察に見付かっても身一つで逃げられるようにしているらしい。捕まっても、プラスチックの椅子を押収されるだけなので、損失は小さいという。ベトナムの警察の目がまだここまで行き届かないこと感じるとともに、途上国で生きていく人々のたくましさを感じた。

#### ・自由散策・国営百貨店

ホーチミン市の人民委員会前のロータリーに面して建つ国営百貨店で、お土産などの買い物をした。各自で歩いて行ったが、日本の銀座と呼ばれる通りもあり、おしゃれなブティックやブランドショップも立ち並んでいて、経済発展を続けるホーチミン市の様子が伺えた。韓国人ビジネスマンやその家族の数が多いそうである。車もバイクも交通量は多く、道路を渡るのに感った。国営百貨店の中にスーパーもあり、現地の利用者もいた。観光客も多く、日本人観光客はホーチミンに来てから特に多く感じた。ベトナムコーヒーから、アオザイまで様々なものがそろっていた。

## 7. ベトナム・スタディーツアーを終えて

下関市 秋野 美鈴

このスタディーツアーに参加する前に、「援助する側・される側」の講義を受けました。

第一回目の「～援助する前に考えよう～」では、される側が援助依存にならないために慈善型援助ではなく、自立を促す技術移転型支援と住民参加型支援などの必要性。そして、相手側の現状を把握するために必要な、援助する側 される側の信頼関係を築くのに時間がかかること。最後に、援助する側がされる側の上に位置するのではなく、両側が同等の立場である必要性を学びました。

この点については、JICA プロジェクト訪問でのフエ中央病院の清水さんの話の中で、ベトナムが必要なものと日本がしたいことが一致しないことや、決まったプロジェクトが予算の関係で進まないこと、他の NGO の活動とダブらないプロジェクトを見出さなければならぬ問題点を知りました。このことから、援助する側は技術面だけでなく適応力や応用力、コミュニケーション力も必要だと学びました。また、フエ中央病院の院長の「これからはフエから山口の新しい橋を創りたい。」という言葉や話の中で、援助する側 される側との関係が同等の立場で医療などの技術の交換を望んでおり、両側が同等の立場の関係を築いていると感じました。

第二回目の「援助する側・される側」では、援助される側から見たボランティアのワークショップを通して、援助される側が援助を受け入れるための準備や手配などが容易では

ないことを経験しました。また、相手側が動くのは当たり前だと思わないことが大事だと学びました。この点について、このスタディツアーの訪問先では私たちのために何か準備をしているのではないかと思い、私に何が出来るか考えてみました。養護学校で働いている友人にアドバイスを求め、知的障害児学校の **Future School** では、折り紙の風船や兜、ぴよんぴよん蛙などを実演しました。動く折り紙や、英語でも今後も、児童が自分たちで折り紙ができるよう、これらの作り方を英語で説明してあるプリントを施設に置いてきました。私たちが訪問した各施設では、私たちのために沢山の人が集まって頂き、また時間を割いて準備した様子を目にし、改めて相手側が持つ私たちへの配慮を感じました。

第三回目の「いざ NGO の現場へ！」では、私にできること・できないこと・何をすればいけないのか、IMAYA の活動、ベトナムの現状や歴史、枯葉剤やホストスポットなどを学びました。IMAYA の活動現場であるクアンチ省では、特殊車椅子を欲している希望者が多くいます。この度、車椅子を受取った一人の青年に「この車椅子でどこに行きたいですか?」と質問したところ、「職を捜しに役所に行きたい。」とのこと。また、去年の二月から車椅子利用者のブインさんは、車椅子の修理を自転車などの修理業と共に職にし、お供え物の飾りや線香作りをしています。他にも車椅子を手にする事で以前より行動範囲が広くなり仕事を持てるようになった方がいます。しかし、農業が中心の地では、まだまだ弱者の職の幅は狭いと感じました。

現在、ベトナムでは **Future School** に通っているダウン症、成長遅延や精神遅延の知的障害者の仕事がなく、OGCDC の次の課題の一つには、知的障害者が仕事を持てるようにすることだそうです。

この度のツアーは私にとって短いものでしたが、本では知り得ない、その地に行かなければ知ることが出来なかったことがたくさんありました。これを機に、ますます国際協力に興味を持ちました。これから、どのような形で国際協力できるのか、今、自分の持っている技術を磨いていこうと思います。



## 8. 小さな“いのち”

元KRY取締役ラジオ局長  
「ワード・パレスチナの母子のための  
ありんこちゃんの会」 藤屋 侃士

フエの尼僧が運営する孤児院を訪れて、その数の多さに驚いた。百九十五人。先日カンボジアのマザー・テレサの修道院が運営する、同じような子どもの家は十七人の幼児だった。

フエの方は赤ちゃん、幼児だけでなく、もっと大きな子供もいる。赤ちゃんがいる大きな部屋、アルミ製のベビーベットがずらりと並び、小さいいのちが鼓動している。

目を覚ましている一人の赤ちゃんを抱き上げた。おしっこの香りとともに体温が伝わってくる。この子はどうして孤児になったのだろうか。

ベトナム戦争で失われたいのちは、北ベトナム側は九十七万六千七〇〇人。南ベトナム側は二十二万五〇〇〇人、このうちアメリカ軍の戦死者は五万七千九百三十九人。大変な数である。

使用された爆薬の量は第二次世界大戦を上回り、史上最大の破壊戦争。

故ヨハネ・パウロ二世が被爆地広島から世界に向けて発信した平和メッセージで「戦争は人間のしわざです。戦争はいのちの破壊です」と言われたことを思い出す。

ベトナム戦争が終わり、三十年以上が過ぎた。南の首都サイゴンのホーチミンはものすごい量のバイクが走り、生きる力のたくましさを感じる。しかし、まだ戦争の後遺症は形をかえ、色んなところにある。

孤児の多さもそのひとつだろう。宗教者たちによって守られている小さいいのち。このいのちが大切にされる時、誰もが大切にされる。

戦争はいのちの破壊であり、どんな理由があろうと許されるべきものではない。戦争は人間のしわざ。人間の存在を越える神・仏への畏敬の気持ちを失い、人間が過信した時、自らのいのちを軽視する結果になってないだろうか。

弱い小さいいのちを大切にすることは自分のいのちを大切にすること。この地に生を受けた誰もが、共に生きる世の中になることを願いつつ、赤ちゃんをベットに戻した。



## 9. NGOネットワーク山口スタディツアーに学ぶ

シャンティ山口事務局長・理事

佐伯 昭夫

同 現地スタッフ

ジッポン・セーヤン

ベトナムは初めての入国です。私がNGO活動を始めた根底には、ベトナム終戦直後の逃げ惑うボート・ピープルをテレビで見たことがあります。生き長らえる一つの希望を求めて、今にも沈みそうな小舟に溢れんばかりの難民が乗り、あてもない大海原へと風まかせに（運がよければ、生きることができるかもしれない）、生まれ故郷をあとに、助けを求めてさまよう姿が脳裏に焼き付いています。

私に出来ることはなんだろうと思いつつ、その後三年が経過し、あるきっかけ（国際障害者年の5年計画）に出会いました。私にできることはと思い、障害者福祉ボランティアに参加しました。二十年間のお手伝いのなかで、カンボジア、ラオス難民とも縁があり、そして、今があります。

ベトナムにこのような形で来れたことが、大変嬉しく、また考え深いものがあります。

前置きはさておいて、スタディツアー一期間中の感想を簡単ですが報告します。みなさんより一足お先に入国しました。入国は大変厳しく、また当局のやる気のない仕事振りを感じました。十七年前のタイと同じで、いかにも袖の下を期待している素振りが伺えました。

みなさんとの合流は午後三時なので、動物・植物園で時間を調整するべく、入園しました。メェメェやぎさんのところで、餌やりのおばちゃんに騙され、100万ドンひったくたれ、とられてしまいました。迂闊でした。ガイドブックに注意書きがたくさん書いてありました！！その後、みなさんと無事合流でき、一安心しました。

I M A Y Aの活動現地訪問、特殊車いす寄贈式典、ホームビジット。身体に障害があり、自力で歩くことが困難な人たちのための車いすで、おじいちゃん、おばあちゃんが多く見受けられました。車いすのお陰で移動が便利となり、これを機に物売りに出かけられることで現金収入が得られるなど、暮らしも少し楽になる。とりわけ、自分自身で出かけることができ、行動範囲が広がり、また多くの人たちと接することが増えて、これまでにない快適な生活となるだろう。贈呈式では緊張していたが、終わるとみんな笑顔になり、私まで嬉しくなりました。

今までの不自由を取り返し、これを機に元気で明るい日々を過ごしてほしいと願います。

## 10. ベトナム・スタディツアーを振り返って

NGOネットワーク山口会長  
小林達志郎

この度のベトナム・スタディツアーを振り返って、感じたことを二、三書き記します。第一にこのスタディツアーは大成功であったと思っています。それは何より、ベトナムに降りて、実に様々な、多様な形で行われている国際協力の現場を、限られた日程の中で効率よく、深く理解しながら廻ることができたからです。

私どもはそれらの事業内容の概要を、あらかじめツアー資料として出発前に渡されていて、現地に着くやいなや、待ち構えていたスタッフから詳しい説明を受けることができ、その際は岩野先生から「必ず質問をするように」と言われていたことも、活性化された現場訪問を生むこととなりました。そのような「事前の配布資料」「現地での丁寧な説明」「必ず質問」という一連の流れが、スタディツアーを成功させた要因と思われます。

そのことは出発前に岩本先生や水野さん、荒瀬さんなどがOGCDCとJICAと連絡を密にとられて、スタディツアーの下準備を周到にさせていただいたお陰だと思っています。本当に有難うございました。

第二はカウンターパートナーの重要性を、今さらながらに強く感じたことです。これは私が係わっているNGO活動（日中キ山教育基金会）と比較して考えたのです。今回のIMAYAさんがベトナムで連携、支援して来られたOGCDCの医療福祉の分野における広範な、力強い活動内容といい、前回のスタディツアーのタイにおけるシャンティさんの現場に根を張った活動拠点のしたたかさといい、これらは、日々、現地で営まれている直接行動としてのNGO活動です。現地での活動こそがNGOの主体となっているものです。

それに比べると、私たちキ山会の活動は、現地の地方行政の教育部門を介しての支援活動であるから、間接的なものにならざるを得ず、その質の差、内容は明らかに違ったものとならざるを得ません。

カウンター・パートナー（相手国の活動拠点）の在り方が、NGO活動の要となるものだと痛感した次第です。

最後にJICAの活動について。私はこの年になって初めて国旗に大きな誇りと喜びを感じる事ができました。

日の丸は、かつて東南アジアにおいては他国領土の攻略の証しとして、近年は専らスポーツや他の分野における他国への勝利の証しとして掲げられ、打ち振られてきました。

この度、JICAの活動現場であるフエ中央病院を訪れた際に、中央玄関のプレートにベトナム国旗と並んで彫り込まれていて、また、前庭の掲揚台上にやはりベトナム国旗と並んで翻っている日章旗を見た時、気持ちが動くものがありました。それまでに病院長をはじめとする多数の職員や、JICAの係員、日本人医師から出迎えられ、説明を受けて、この病院は設計から建築、医療機器にいたるまで、日本の資金によって設立され、現在もなお、日本人意思を中心として、JICAによって地域医療サービスの改善プロジェクトが実行中であることを聞き、病院内の各部署を見学しました。そして、一歩外に踏み出た瞬間、このプレートと鮮やかに翻る国旗が目に入ってきました。その時、「あ、日本はこんなに素晴らしい事業をベトナムで行っているのか」と、「これは自国の勝利に酔って翻るものでもなく、他国との友好の協働の証しとしての日の丸である」と感じた時、思わず涙ぐんでしまうほどの深い喜びと誇りを感じることができました。

私たちはこのベトナム・スタディツアーによって、日本のNGOやODA活動の現場を見ることを通じて、ベトナム戦争は過去のものではなく、枯葉作戦や埋設された地雷被害として、現実の問題としてベトナムの日々に深い影を落としていることを知りました。

ツアーの最後に訪れたホーチミン市の戦証博物館で見たもの、感じたことは、私たちの記憶の中で、決して時と共に薄れていくものではないと思われるのです。

それにしても、ホーチミン市の繁栄と喧噪とアメリカナイズされた電飾看板の氾濫は、ベトナムの戦争で勝ったのは、本当はアメリカなのではないかと、ふと疑いをもたせる光景でした。

このツアーをお引き受け下さいました岩本先生、本当にご苦労さまでした。ありがとうございました。